

研究ノート

## 近世後期から明治期にかけての福井市街足羽山の茶屋・料亭

—「晴嵐亭」「五嶽楼」を中心に—

柳沢美美子\*

はじめに

1. 18世紀の愛宕山遊山と茶屋「市太夫」
2. 褒賞として料理と「市太夫」の福井藩賄御用
3. 「二右衛門」から「五嶽楼」へ

まとめにかえて

はじめに

福井市街南西に隣接する足羽山は、標高116メートル余の独立丘陵で、山上には足羽山公園が整備され桜の名所として賑わう。自然林のなかに通年営業の飲食店やカフェが点在し、四季を通して多くの市民に親しまれている。足羽山と称されるようになったのは、明治期以降のことであり、江戸時代には一般に「愛宕山」と呼ばれた<sup>1)</sup>。

19世紀にはいった頃の足羽山の賑わいは、『越前国名蹟考』に収載された「足羽参記」<sup>2)</sup>がよく伝えている。松玄院、足羽社、勝軍地藏（愛宕大権現）にいたる愛宕坂には、楊弓屋や「塩梅よしの田楽」屋が並んでいたことがわかる。



写真1 足羽山(部分、『若越宝鑑』)

\* 福井県文書館副館長

また、明治中期の刊行で、細密な銅版画による足羽山の俯瞰図（写真1）を収載している『若越宝鑑』<sup>3)</sup>では、足羽山のように次のように描写されている。「登臨すれば、四方眼界を遮るものなく景趣甚だ妙なり、登路に石場、清水百坂、黒竜坂の三条あり、石場を本道とす、石場より躋れば石階<sup>のほ</sup>壘々として左右に酒樓、茶亭あり、五岳樓、清嵐亭最も名あり」（以下、引用資料の傍注は筆者による）。

本稿で中心的に取り上げる「晴嵐亭」「五嶽樓」は、この3本の登山道のうちの本道とされる、北東麓の石場町からの登山ルート、愛宕坂（横坂）に位置していた。「晴嵐亭」の終焉<sup>4)</sup>は不明であるが、「五嶽樓」は1994年（平成6）頃<sup>5)</sup>まで続いており、その眺望や雰囲気<sup>のほ</sup>を記憶に留めている人は少なくないだろう。

福井城下・市街の茶屋・料亭については、これまでほとんど検討が加えられておらず、『稿本福井市史』および『福井市史』通史編2がわずかに紙幅を割いているのみである。また個々の料亭の経営資料等も現在のところ見出されていない。本稿はこうした資料的な制約から、足羽山の茶屋・料亭についてその利用のあり様を記した日記等を手がかりに、その動向と社会的な役割の変容を考察しようとする試みである。「晴嵐亭」「五嶽樓」の2店は、以下2において述べるように江戸時代の呼称がわかる足羽山の4店のうちの主だった料亭であり、「市太夫」「二右衛門」といった一般的な呼称が見逃されやすく、そのあり様がほとんど注目されてこなかったものである。

## 1. 18世紀の愛宕山遊山と茶屋「市太夫」

愛宕山の茶屋や料亭の存在は、どの時期まで遡って確認できるのだろうか。「愛宕山の料亭」という小見出しを設けている『福井市史』通史編2では、1722年（享保7）7月の触書「愛宕山遊山夥敷有之候由ニ付御メリ之事」<sup>6)</sup>を紹介している。このころ、愛宕山には大勢の遊山客が訪れており、口論や酔狂にかかわる事件が危惧されたため、町人どもは遊山を慎むよう命じられていた。この触書からは18世紀前半の愛宕山の賑わいぶりが確認でき、こうした遊山客が利用する常設の茶屋がすでに存在した可能性が推測されるが、資料からは明確にはわからない。

ただ、ここから20年も経ていない1739年（元文4）4月になると、茶屋の夕刻以降の営業が制限される。これも『福井市史』通史編2が紹介している「御家老中御用留抜集」によれば、「愛宕坂茶屋仕者共、近年六ツ切ニ相仕廻候様」に規制されたことにより、午後6時頃より遅い時刻での茶屋の利用ができなくなり、一方で「町方ニ仕出し茶屋、多出来」したため、愛宕山の茶屋は「渡世仕兼」る事態となった。このため、夕刻以前から「居懸り候者共」が「六ツ過宵之内迄」居ることができるようにたびたび願い出て、日没直後までの営業が町奉行土屋十郎右衛門から認められた<sup>7)</sup>という。「愛宕坂茶屋仕者共」という表記からは、愛宕坂で茶屋を営む者が複数あったことがわかる。

このように元文期（1736-41）頃には、愛宕坂あたりだけでも複数の茶屋があり、これに対する藩の営業時間規制に対応して、福井城下町方には注文によって料理などを作り、注文先へ届ける仕出し茶屋も複数出現していた。

さらに18世紀後半、1789年（寛政元）の本願寺法主法如の越前下向についての記録「御門跡様御下向」<sup>8)</sup>には、具体的な茶屋の営業者「市太夫」が登場する。法如は、同年6月26日に福井御坊に到着

したが、おりから続いた大雨で翌月閏6月5日には九頭竜川にあった舟橋も流される大洪水となり、福井城下に逗留することを余儀なくされた。吉崎参詣が叶わない法如から「気ヲ被転候場所遊参所等ハ無之候哉」と尋ねられた輪番らは、「愛宕山ト申ハ城下ヲ見ハラシ候遊参所」と申し上げた。すると法如は「物喰候処ハ無之哉」と問うので、「賤キ茶屋五、六軒御座候」と返答したため、愛宕山登山と茶屋「市太夫」への下向が準備されることになったという。しかし、「最初御案内申候人甚タ不届」「御下り被遊候ハ、御機嫌ニ相障」と主張する肝煎同行や講中らによって強く反対され、結果的には法如の「市太夫」立ち寄りを実現することはなかった。この資料からは、寛政期（1789-1801）の愛宕山には5、6軒の茶屋があり、そのうちの 하나가「市太夫」を名乗っていたことがわかる。ただ、この時の「市太夫」は、主だった門徒らから法主を案内するには相応しくないとされる「賤キ」茶屋であった。

しかしこの「市太夫」は、およそ半世紀後の1838年（天保9）には福井藩から「御台所御用向出精ニ付」<sup>9)</sup> 扶持米2人扶持が給されるようになる。この扶持米給付は、「市太夫」が「年始御式正并御祈禱御賄御入用之分、為冥加年々上納可仕旨」の内願書を提出したことに対応したものであった。すなわち、「市太夫」が藩の正式な年始儀礼や祈禱の際の賄いを冥加として年々上納する旨の内願書を提出したので、評議の結果扶持米給付が決まったものであった。「是迄年々被下候米壹俵、以後不被下候」とあることから、「市太夫」がこうした儀礼の際に賄いを提供する慣例は、扶持を給される38年以前からあったと考えられる。

この「市太夫」は「山<sup>やま</sup>市太夫」を称し、その後倅鍋八・彦一、孫の「松玄院門前 山市太郎」まで4代にわたって扶持米を下付され<sup>10)</sup>、次に述べるように明治期には「晴嵐亭」を名乗る料亭であった。

## 2. 褒賞として料理と「市太夫」の福井藩賄御用

前述の『福井市史』では「愛宕坂を代表する料亭は、市太夫・二右衛門・二兵衛・一右衛門の4家であった。市太夫家は藩の御用を勤め、晴嵐亭と称した」と述べているが、出典は示されていない。この典拠は、おそらく明治中期に県内で刊行された名所案内『福井名勝記』<sup>11)</sup> に収載された漢文「晴嵐亭記」によるとと思われる。「晴嵐亭記」には「明治辛卯秋九月」（1891年（明治24）9月）の年紀があり、筆者は福井藩士で藩校明道館教授を務めた富田鷗波（厚積、1836-1907）である。ここには足羽山（愛宕山）で比較的古くから「旗亭」（料理屋）を営んでいた4戸として「市太」「市右」「二兵」「二右」が挙げられていた。そのうち「市太」には、翼を広げるように断崖を臨んで建つ一亭があり、「晴嵐」と呼ばれた。富田によれば、「市太夫」は波著寺の末裔で、一度出家しながら還俗し、頭をまるめた僧形のままで割烹に卓越していた店主は、洛東円山の安養寺坊が阿弥号を称して飲食を供し遊興の場となっていることに擬えられたり、「晴嵐亭」の風情から長沙（瀟湘）八景に因んで「山市晴嵐」と呼ばれたりしたと記している<sup>12)</sup>。

福井城下米町の米問屋で、藩の札所元締役や産物会所元締役などを務めた山口家の記録「山口家譜」<sup>13)</sup> には、御用金調達などに応じてたびたび勘定所や御泉水屋敷等において料理を下されたことが記されている。料理頂戴に関する記述は、1790年（寛政2）から1861年（文久元）まで46か所にわた

り、その場所は、勘定所が26回と最も多く、それ以外では「市太夫」5、御泉水屋敷4、御札所3と続いている。「市太夫」に関する記述は以下のとおりである。

- (1) 文政4.12.3 「横坂市大夫方ニ而、金毘羅講段々心配ニ而札嵩相増候ニ付御料理被下、則小右衛門へも御料理・御酒被下置候、此会札高六万式千五百九拾式枚」
- (2) 文政6.12.5 「(前略) 各出情ニ依而若殿様初御目見御祝事御首尾能被為濟御満悦ニ被思召候段、依御目録桐御紋御上下被下、夫々横坂市大夫方ニ而御料理被下候」
- (3) 文政10.5.22 「(前略) 御勝手向御難渋之所是迄何茂格別出情、御指支も無之御入部も被為在御満足思召候 (中略) 御目録を以沙・綾巻巻ツ、被下置、横坂市大夫方ニ而御料理被下候」
- (4) 文政11.8.29 「(前略) 御扶持方式人扶持御増都合六人扶持ニ被成下、御内御御用達役被仰付 (中略) 御頼金千式百両、但子丑刁と三ヶ年上納為御会積米金千両ニ付米百拾俵ツ、元利相濟 候迄被下候、但三ヶ年ニ上納四ヶ年目々元金拾ヶ年済シ／即日山市大夫方ニ而御料理被下候」
- (5) 文政12.1.22 「横坂市大夫方ニ而御料理・御酒被下候」
- (6) 天保11.5.4 「加州宰相様御通行ニ付、別家八十八方下宿被仰付則前田<sup>(前田齊泰)</sup>図書様御昼相勤ル、外ニ下宿有之、上下八十式人、尤賄御上々山市大夫引受御宿のミ相勤可申事、茶指上ル、御菓子八十八ヶ献上、委細御用留ニ有之、御茶代五百疋被下候、尚委細御用帳ニ有」

(1) 1821年(文政4)の金毘羅講は、19年に三国湊久昌寺の名義で企画され、当初から山口与兵衛が「世話役」を務め<sup>14)</sup>、この講に関わって勘定所からたびたび紬生地や銀などを下されており、勘定方を掌る御奉行蜷川林左衛門<sup>15)</sup>が関与していたことからほぼ藩の事業と考えられる。これ以外の(2)～(5)でも「市太夫」は、「若殿様」(仁之助、後の藩主齊承)の將軍への初目見行事や、「御頼金」などの藩御用金に貢献した際の褒賞として、勘定所や御泉水屋敷以外では、見晴らしのいい横坂(愛宕山中腹)の「市太夫」において料理を下された。

このように「市太夫」は、扶持米を給与された1838年(天保9)以前、文政期(1818-30)においても、御用金調達に協力した有力商人への饗応の場として利用されていた。

さらに(6)の加賀藩主の城下通行の際には、山口家などの有力町人は宿のみを提供し、「市太夫」が加賀藩家臣ら82人の昼食や宿泊時の夕食・朝食について、料理仕出しを一手に担当していた。

またこれ以外に、「山口家譜」には、明治中期には途絶えてしまう<sup>16)</sup>「市右衛門」が登場している。これは、(6)と同様に有力町人が宿のみを貸し、食事(料理)は料亭から提供した事例である。すなわち、1841年(天保12)3月の条で「本保役人御札所御内用ニ付、福井止宿ニ付訳合在之、手前二足庵止宿御頼ニ付、無拠御札所へ御貸申上、格別御馳走御取扱可被成義ニ付、幸右衛門<sup>(山口)</sup>昼夜浜町へ引越居料理人山市右衛門諸道具共格別心配いたし、日々取替三月十日々十三日迄逗留、内御泉水<sup>(御泉水屋敷)</sup>へも被参候、府中々付添町人式三人有之」(傍注筆者)と記されている。幕府領の本保陣屋の役人が藩札関連で福井城下に宿泊する際に、山口家に宿泊を依頼され、3泊の逗留の間当主の幸右衛門は浜町へ引き移り、「市右衛門」が食事を提供したというのである。

ここで「市右衛門」は「諸道具共格別心配」したとされていることから、この場合の「仕出し」は、単に注文に応じて調理し届ける出前料理というより、会場に調理設備や器具、食器等を持ちこんで、食膳を設える現在のケータリングに近いものであったと推測される。

さらに、こうした出張での料理提供を「市太夫」が福井城内で行っていたことが、松平慶永（1828-90）の側頭取であった鈴木主税<sup>17)</sup>（重栄、1814-56）の「御用日記」草稿<sup>18)</sup>からわかる。「市太夫」は、1847年（弘化4）2月26日、藩主松平慶永（春嶽）が7か寺の菩提寺<sup>19)</sup>の住職方を招いてもてなした際に、城内へ出張して「仕出し」で料理を提供した。

もっともこのエピソードは、すでに『稿本福井市史』下巻で『郷土史蹟考』をいう資料を出典にして詳細に紹介されている。馬事や庭拝見、招待客の求めに応じて絵師（奈良元碩）が即席に絵をかく席画などの余興とともに、「御料理は愛宕山の市太夫（晴嵐亭）の仕出しであった」<sup>20)</sup>と言及されている。『稿本福井市史』にはその際の献立が掲載されているが、若干異なる部分があるので以下に掲載する。『稿本福井市史』では触れられていないが、控室となったのは、藩主の住居である西三の丸の御座所<sup>21)</sup>の「鉄砲間・二ノ間」、食事の会場となったのは、「御座間・二ノ間」（写真2）で、馬事が行われた「二ノ丸御馬見所」では大奥からも重詰と酒が出された。また市太夫の料理は、台所方が用意した夜食用の膳と朱塗りの碗で供され、食事の最後には、大奥が製した汁粉がふるまわれていた。

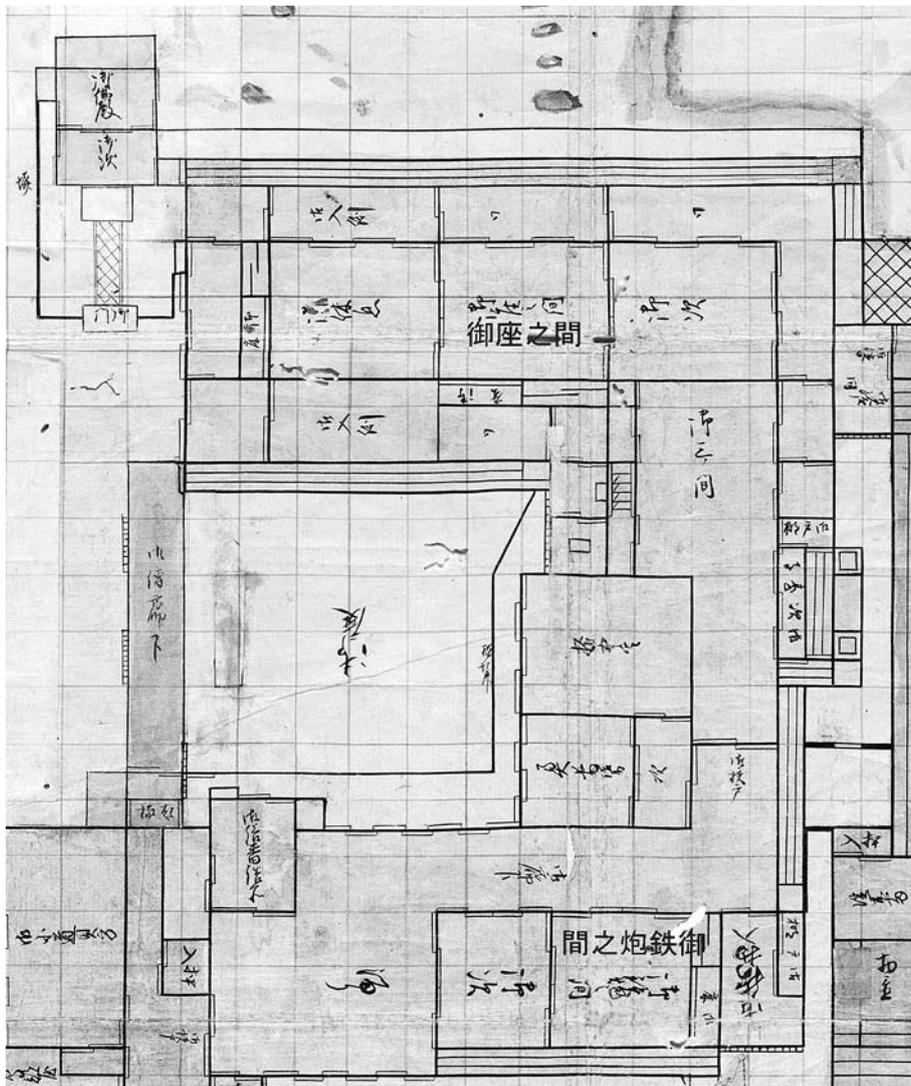


写真2 福井城西三の丸御座所（部分、「御座所絵図」松平文庫、福井県立図書館保管）

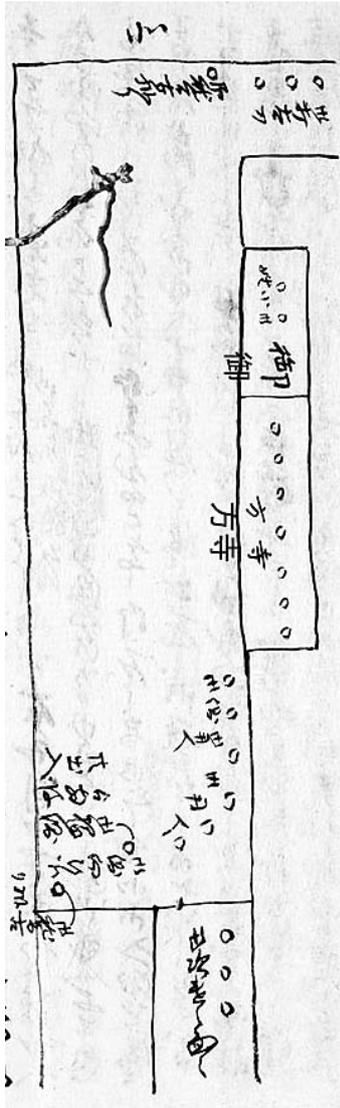


写真3 武芸拝見時の座配図  
(稽古所、「少傅日録抄」  
松平文庫、福井県立図  
書館保管)

一御献立左ニ記之、巳年之如例、但山市太夫仕出し膳器ハ、御台  
から出ル、御夜食膳朱碗

- 生菓子 (練ようかん三／霜紅梅二／若な餅二)
- 平 (ふき／みつは／竹のこ／山のいも／  
しいたけ)
- 汁 (こま豆腐／わらひ／小結ゆば)
- 小皿 香の物／ならつけ大こん
- 飯

外ニ田楽鉢盛ニ而出之 (御近習番銘々／平のふたへ  
取遣ス／代り有之)

後段汁粉 如巳年、御膳番の相頼大奥ニ而製之、餡砂糖等  
相廻之

羊羹壺箱 少々召上り、今日御取持之御側御用人御用人へ  
被下之

右寺院方々巳年如例大奥へ指出献上之

上記に見るように、この菩提寺住職らへの接待は巳年の例に倣うものであった。1843年(天保14)の初入国から、いまだ日が浅い慶永と鈴木主税ら側近は、この行事をそれ以前の慣例、とりわけ前々年、慶永が在国した巳年、45年(弘化2)春の最初の例を念頭において準備していた。

慶永が桜の季節に初めて在国したこの時(1845年2月24日)の菩提寺の住職方を招いた催しは、「少傅日録抄」<sup>22)</sup>に記録されている。この時の余興は、二の丸馬場の桜拝見、同馬見所で馬術、そして御座所御稽古所において槍術・剣術などの武芸が催された(写真3)<sup>23)</sup>。その際、御座所御座の間・二の間で「一汁一菜、外田楽」を出したのも「先例之通り、山市太夫仕出し」であった

と記されている。47年と同様にその合間に大奥から重詰と酒、最後に汁粉も供されていた。

こうした催しが行われた弘化期は、90万両の借財をかかえた藩財政再建のため、43年(天保14)から断行された藩札整理は一段落していたものの、なお徹底した儉約と簡素化が進められていた時期でもあった。かつて僧籍にあった「市太夫」が提供する料理が菩提寺の住職たちへのもてなしに相応しく、前例が踏襲されたと推測されるが、「当年者御料理等格別御省略」<sup>24)</sup>と記されていることから、「一汁一菜、外田楽」の献立は前藩主時代に比べれば格段に簡素なものとなっていた。

前述したように「市太夫」は市太郎までの4代にわたって福井藩から扶持米を給された。1866年(慶応2)の市太郎の代替りの際には、「年始御式正并御祈祷御賄御用之方江冥加銀貳百六拾五匁七分七厘ツ、上納致来候得共、以来上納ニ不及候事」<sup>25)</sup>という但し書が付されていた。このことから、慶応期にいたるまで、年始行事や「祈祷御賄」の際には「市太夫」が関わっていたと考えられるが、

現在のところ弘化期以降で「市太夫」が関わった福井城内の催しを資料上で確認することはできない。「祈祷御賄」の具体的な職務内容は不明であるが、上記のような菩提寺住職への饗応もこれに含まれていたと見ていだろう。

### 3. 「二右衛門」から「五嶽楼」へ

いっぽう、明治期中期には「五嶽楼」を名乗る「二右衛門」が福井藩から扶持米を下付されたのは、「市太夫」より20年ほど遅い1859年（安政6）で、「山田二右衛門」の名で「御内用達助役」を仰せ付けられ2人扶持が給された。

吉田郡二日市村の加藤理右衛門の1857年（安政4）から73年（明治6）までの日記<sup>26)</sup>には、安政期から明治期初年にかけての「山 仁右衛門」が登場する。二日市村は福井藩領であったが、府中本多家の地方知行地であり、加藤家は府中領の大庄屋格を務めていた。

- (1) 安政4.3.5 「御上御講吉川甚兵衛差支ニ付、山仁右衛門方ニ而会所、不快ニ付嘉兵衛へ頼ミ通かけ銀差越申候」
  - (2) 元治元 .11.7 「府講山仁右衛門、牧安名代ニ遣ス、谷安ニ泊り」
  - (3) 慶応元 .4.24 「府中御講山仁右衛門方ニおゐて会合、自分出福（後略）」
  - (4) 明治元 .10.25 「府中講満会ニ付、山二右衛門方へ行、夕方米善へ帰り、同所ニ而夕飯致し泊り」
- ここでは、「二右衛門」は「府中講」で会場として使われている。

また、福井城下近郊の種池村で、庄屋を務めた父から若くして家を相続した坪川武兵衛が記した日記でも、以下のように「府中講」の会場として使われていた（(2) (3) は、別の資料に記された同じの日の記録である）。なお、府中講については、詳細は不明である。

- (1) 慶応元 .4.21 「一当廿三日・廿四日御講相勤り候旨、庄屋五郎右衛門方ろ歩行番次郎左衛門内触申候、則廿三日ニ山二右衛門方江出席申候」<sup>27)</sup>
- (2) 慶応3.3.24 「一同拾五匁 福 山仁右衛門ニ而／府中御講満会ニ付被下物有之（後略）」<sup>28)</sup>
- (3) 慶応3.3.24 「武兵衛府中御講御満会ニ付山仁右衛門迄出席、晩方六ツ半時帰宅（後略）」<sup>29)</sup>

この後、明治初年の足羽山の料亭のようすを知ることができる資料を見出すことはできないが、1872年（明治5）になると、「清和楼」（のちの五嶽楼）が登場する。「壬申仲春初二日」すなわち2月2日、富田厚積は「清和楼」で東帰する友人のために漢詩を詠んでいる<sup>30)</sup>。

同じ年、旧大野藩士で学区取締を務めた吉田拙蔵は、学制発布後間もない9月1日の足羽県の学校関係者の集まりについて記している。吉田は足羽県学校の「学神祭」に列席した後、当時県が招聘していた御雇い外国人ワイコフとマゼットを交えた酒宴に出席し、これが「愛宕山清和楼」を会場に開かれたことを書き留めている<sup>31)</sup>。吉田は10月25日にも同楼へ立ち寄っており、「仁右衛門」はこの頃までに「清和楼」を称していた。

その後1877年（明治10）は、墓参のために慶永と茂昭がともに帰福した。旧藩主2名がそろってもどってくるのは、廃藩後初めてのこと<sup>32)</sup>であり、「仁右衛門」にとっても、福井の人びとにとっても記憶に残る出来事であったと思われる。ふたりは、5月20日から6月6日までの17日間、「足羽山山田仁右衛門宅」に逗留したのである<sup>33)</sup>。この時には石川県権令桐山純孝を「晴嵐亭」に招いており

(6月3日)、福井支庁の三橋久実、相馬朔郎、その他に中根雪江、千本久信、毛受洪、武田正規が陪席した。

この滞在時に、春嶽は「山田仁右衛門」から東側に竣工した新楼に楼名を請われ、その時のようすを漢文「水態含青楼記」<sup>34)</sup>に記している。春嶽は、足羽山からの眺望にとりわけ思いがあったようだ。四方に視野が開け、群峰が連なる、その下に足羽川が奔放に屈曲して流れ、北を望めば新保の浜が3里にわたって続き、はるかに长空(大空)と接している。それは「余ノ旧里第一之佳境也」と記している。年紀は福井帰郷の翌年、1878年(明治11)5月であり、唐の文人官僚蘇頲(述)の詩の一節に因んで「水態含青楼」と命名したことが記されている。

しかし、数年後の1882年(明治15)に「仁右衛門」を訪れた清の文人で書家である王治本が記した漢文「五嶽楼記」では、楼から並び立ってみえる「椿嶽、白嶽、芳嶽」(白椿山、白山、吉野ヶ岳)と、楼中にある「春嶽」「巽嶽」2侯の題額とをあわせて、「五嶽楼」の名の所以が説明されている。王治本は明治10年春に春嶽と交流し、越山の景勝について春嶽が語ったのを聞いたと記している。「五嶽楼記」はその後に「五嶽楼」を訪ね、その所以を書きとめたもので、82年(明治15)頃には、「五嶽楼」の呼称が浸透していたことがわかる。

1882年(明治15)から残っている『福井新聞』においても、東北鉄道の発起人となった有馬・小笠原・土井・本多ら旧藩主層の会合(1月13日付)、足羽・吉田両郡の勸業有志懇親会(1月18日付)南越自由党の結成(9月1日付)などで、会場として使われたのが「五嶽楼」であった。

なお、前々年の80年に福井を訪れた歌人佐々木弘綱の紀行「加越日記」<sup>35)</sup>でも、4月24日の歌会の会場は「五嶽楼」と呼称されていた(4月8日・13日の会場は「晴嵐亭」)。

さらに、明治末期の新聞記者による訪問記<sup>36)</sup>では、1877年(明治10)5月の日付の添え書が付された巻物の文言が記録されている。これは、1911年(明治44)1月13日に「五嶽楼」を訪れた北日本新聞の記者中川信吾によるもので、女将から「横軸の絹地に墨痕鮮かに五嶽楼と記され」た巻物を見せてもらっている。「五嶽楼」の文字に添えられた添書は以下のとおりである。

余這回旧封土先塋詣拜に赴く、宿を山田氏に投ず、有楼清和前田雲洞<sup>37)</sup>氏の命名なりといふ、予除考ふるに清和之字は、清和帝の御名と同じ、これをするものは恐縮に堪へざる也、欧公之六一に倣ひ豊公伏見三夜之例に照らし五岳と名つく、いかんとなれば白岳あり、芳岳椿岳、こゝに宿する春岳あり巽岳あり併せて五岳、此額を記するものは誰ぞ、<sup>(譯)</sup>樂石川の春岳(読点、傍注筆者)

ここでは、清和の楼名は清和帝に通じるため、北宋の文学者欧陽脩の号の六一居士や豊臣秀吉が一夜に三夜分の月の勝景を賞した逸話に照らして、「五嶽楼」と命名したとされている。

1909年(明治42)6月に「五嶽楼」で夕食をとった柳田国男も「五嶽といふは春嶽老侯の命名、自分も一嶽に加ふるよし記文あり」<sup>38)</sup>とこの添書と思われる文書について記していた。

このようにみえてくると、1877年(明治10)に「五嶽楼」、翌78年に「水態含青楼」と相次いで春嶽が名付けた楼名に関する資料が確認され、やや不明な点は残る。

しかしこの点については、旧大聖寺藩主前田利邨の日記「御帰県日記」<sup>39)</sup>が示唆を与えてくれる。東北鉄道の株金募集のために帰郷した前田利邨は帰途、1882年(明治15)2月24日、「五嶽楼」に宿

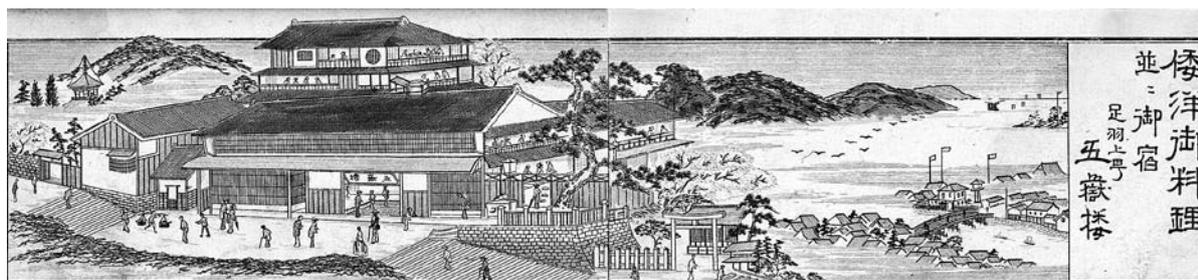


写真4 五嶽楼（『福井県下商工便覧』1887年）

福井県立博物館蔵

泊した。「午後五時五十分福井五岳楼に御着」「当楼ハ福井第一等ノ見ハラシヨキ処ト云」「楼上春嶽君ノ水態含青楼ノ額、次ノ間ノ三畳ニ前県令桐山氏ノ青山緑江ノ四字額ヲ掲ク、此楼尤高クシテ上ニ登岩アリ、石壇ノ左右ミナ料理亭ナリ、五岳楼ハ半腹ヨリ上ニアリ、市中ノ大橋ヨリ望メバ、山間ニ薨出沒シ、洛東円山ノ左阿弥、正阿弥等ノ各寮ヲ四条橋ヨリ望ムガ如シ」と記されている。ここからは、春嶽の「水態含青楼」の額とともに、多くの来訪者の額が掲げられた建物内のようすがわかる。ここでは料亭内の最も高い楼（前述した東側に竣工した新楼であろうか）内に「水態含青楼」の額が掲げられ、料亭総体としては「五嶽楼」の呼称が用いられていた。

以上から、春嶽と茂昭が揃って帰福した1877年（明治10）以降少なくとも数年後の80年頃から人びとに受け入れられ、広く用いられた料亭としての呼称は「五嶽楼」であった。

なお、愛宕坂における「五嶽楼」の位置には、昭和戦後期にかけて若干の移動があった。明治中期の「五嶽楼」は、麓から足羽神社にむかって愛宕坂の右側に位置していた（写真4）。1900年（明治33）4月の橋南の大火で焼失<sup>40</sup>したのちも、昭和戦前期まで同じ坂の右側にあったことが複数の資料で確認できる<sup>41</sup>。福井空襲の際にすぐ上にあった松玄院は焼失<sup>42</sup>したことがわかるが、五嶽楼が被災したかどうかは不明である。その後戦後にはやや坂を下った左側（福井市橋曙覧記念文学館の位置）に移転したと考えられる。

### まとめにかえて

以上のような考察から、1足羽山には元文期（1736-41）頃までには、愛宕坂あたりだけでも複数の茶屋があり、これに対する藩の営業時間規制に対応して福井城下町方には仕出し茶屋も出現していた。そして寛政期（1789-1801）には5、6軒の茶屋のうちの一つが「市太夫」を名乗っていたが、この頃の「市太夫」は、いまだ賓客（法主）を案内するには相応しくないと思われるような粗末な状態であった。

しかし、その後2文政期（1818-30）までには、しだいに料亭としての体裁と実績を整えていったと考えられ、御用金調達に協力した有力商人への褒賞の場として利用されるようになった。さらに扶持米を給された1838年（天保9）頃から、年始行事や「祈祷御賄御用」として「市太夫」が料理を調べ、福井城内へ出張する場合もあった。その後明治10年頃には「晴嵐亭」と改称したことが確認できる。

いっぽう3「二右衛門」は、幕末には「府中講」の会場として利用され、明治初年には「清和楼」

を名乗り、その後松平春嶽・茂昭が帰福し宿泊した1877年（明治10）から間もない時期から「五嶽楼」と呼ばれるようになった。

本稿で取りあげた日記類は一部に過ぎず、十分な資料検索ができていないとはいいたい。また足羽山の茶屋・料亭に焦点をあてたことによって、『稿本福井市史』が福井城下町方の「米町、一乗町、魚町」に発達した料理店は、最初は肴屋の兼業<sup>43)</sup>としていることの妥当性については、全く検討できなかった。福井市街の料亭には明治中期だけでも、足羽山には他にはりま風琴亭、足羽河畔には風月楼・坪吉・大賀楼・五醉亭・西京楼・月見亭、市街中央には佐佳枝町の秋月楼・旭日亭、錦町の寒松園・花月楼、佐久良町の三階楼・江戸庄・一二三亭・千金楼・盛松亭など<sup>44)</sup>があったことがわかるが、江戸時代からの連続性や魚屋との関係はほとんど検討されていない。たとえば近世後期に金沢では、魚屋の料理営業を規制するために株仲間が形成されたこと、一時全面禁止の時期を経て、料理の奢侈化を抑制するための料理値段の規制が行われたことが明らかにされている<sup>45)</sup>。福井においても現在に至るまで、魚屋が料理屋・料亭を兼業することは一般にみられることから、こうした視点からの検討を含め今後の課題である。

〔付記〕本稿の作成にあたり、本川幹男氏、伊与登志雄氏に御教示いただいた。

## 注

- 1) 一乗谷にあった愛宕山勝軍地蔵が、柴田勝家によって足羽山に移されてから、江戸時代に「愛宕山」と呼称されるようになったという（日本歴史地名体系18『福井県の地名』1981年、p.264）。
- 2) 「足羽参記」『越前国名蹟考』松見文庫、1980年、p.316～p.317。青柳周一「江戸時代の越前・若狭を旅した人々」では、「足羽参記」とともに近江商人中井源左衛門が日野から敦賀・福井を経由して、越後・奥州へ向かった1835年（天保6）の旅の記録『四番諸事日下恵』に記された遊山人が多く賑やかな愛宕山のような紹介している（『福井県文書館研究紀要』12、2015年）。
- 3) 渡辺豊陽『若越宝鑑』1899年。
- 4) 「晴嵐亭」は、遅くとも昭和戦前期までに閉店したようだが、詳しい年代は不明である。1913年（大正2）年10月22日には、高岡から福井に入った高浜虚子が晴嵐亭を訪れている（「北陸旅行の日と人」『定本高浜虚子全集』14、毎日新聞社、p.251）。
- 5) 『福井新聞』では、1995年（平成7）12月15日付「心のプロムナード 福井市歴史の道構想 愛宕坂周辺」の記事で「旧料亭『五嶽楼』の建物を、曙覧の資料館として活用しようという提案の声もあがっている」とし、「旧料亭」と表記されている。また、翌年3月の「魅れ県都」という特集のなかで「料亭並んだ愛宕坂 笏谷石段再び、茶屋も」と題された記事で「最近まであった料亭『五嶽楼』」と表記されている（1996年3月2日付『福井新聞』）。

料亭としての営業は1994年くらいまでには終了していたようで、その後ケータリング等で会場のみを提供する時期があり、その跡地に2000年（平成12）4月、「福井市橘曙覧記念文学館」が開館した。同館解説シートでは、「平成6（1994）年に幕を閉じ」たとされ、「五嶽楼」に因んで眺望が楽しめる「五嶽テラス」が設けられた。

- 6) 松原信之執筆部分。出典は「諸事御用留抜書下書」松平文庫（福井県立図書館保管）〔福井県文書館資料群番号－資料番号 A0143-20732、〔 〕内は以下同様〕。
- 7) 「御家老中御用留抜集 三」松平文庫〔A0143-20699-003〕。
- 8) 「御門跡様御下向 全」常興寺文書〔I0135-00012〕。宇佐美雅樹「寛政元年の本願寺法如越前下向」『福井県文書館研究紀要』12、2015年による。

- 9) 「福井城下扶持人姓名書上」『福井市史』資料編 7、2002年、p.175～176。
- 10) 同上、p.176。
- 11) 横山順『福井名勝記』品川太右衛門、1893年。
- 12) 「晴嵐亭記」『福井名勝記』品川太右衛門、1893年。
- 13) 「山口家譜」『福井市史』資料編 7、2002年、p.259～383。
- 14) 前掲「山口家譜」、p.274。
- 15) 蜷川林左衛門については、福井県文書館資料叢書12『福井藩士の履歴』4、2016年、p.277。
- 16) 前掲「晴嵐亭記」では、「市右ナル者ハ今ハ則チ無シ」としている (p.49)。
- 17) 鈴木主税が側向頭取に任ぜられたのは、1845年(弘化2)2月9日。慶永が藩主となった1838年(天保9)から側向頭取を務めていた熊谷小兵衛と前波忠兵衛が、それぞれ43年4月と翌44年(弘化元)8月に隠居・転任したあとには、浅井八百里(1813-1849)がひとりで側向頭取を務めていた。その後鈴木が着任し、浅井が目付へ転任する46年(弘化3)7月までの5か月間は、浅井と鈴木が同職にあった。鈴木主税は、その後48年(嘉永元)9月側締り役、51年2月御役御免、近習。52年6月17日金津奉行(『福井藩士履歴』3、2015年、p.205)。
- 18) 鈴木重栄「弘化四丁未歳正月ヨリ同年三月十八日迄 御用日記」宮崎長門家文書[A0180-00001]。大正期の越前松平家の藩史編纂事業(「越前史料」国文学研究資料館)において筆写されながら、その後原本の所在が不明であったが、2014年に福井県文書館に寄贈。翻刻は、下記 URL 参照。  
<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/m-exhbt/20141112AM/1847goyonikki-fulltxt.pdf>  
 またその概要については、拙稿「鈴木主税の弘化四年『御用日記』」『福井県文書館研究紀要』12、2015年参照。
- 19) この時に招かれた菩提寺は、運正寺、大安寺、孝顕寺、瑞源寺、天竜寺、花蔵寺、東光寺の7か寺であった。都合が悪く出席できなかった慈本院に対しては、先例のとおり「大奥御細工物并御料理田楽共御生菓子(汁粉ハ被下ノ無之)」が御用人を通して下付されている。
- 20) 『稿本福井市史』下巻、p.1013～1014。
- 21) 慶永は、1843年(天保14)の初入国に際し、御座所を本丸から西三ノ丸に移した。その後この御座所は、64年(元治元)に東三ノ丸へ新築・移転するまで利用された(『福井城史料調査委員会報告書』2013年、p.38)。
- 22) 弘化2年2月24日の条「少傅日録抄」松平文庫[A0143-01110]。
- 23) 席画は、武芸拝見にかわって行われた1847年(弘化4)の新しい催しであった。
- 24) 同上。
- 25) 「福井城下扶持人姓名書上」『福井市史』資料編 7、2002年、p.176。
- 26) 加藤竹雄家文書[A0052-01413～01427]。一部翻刻 pdf (草稿版) が以下の URL にある。  
<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/Darchives/DAindex.htm> の加藤竹雄家文書参照。
- 27) 「種池村行事留」『福井市史』資料編 9、1994年、p.615。
- 28) 「坪川家諸払留」『福井市史』資料編 9、1994年、p.659。
- 29) 「坪川家日記留」『福井市史』資料編 9、1994年、p.705。
- 30) 富田厚積『還読斎遺稿』1913年、57丁。国立国会図書館デジタルコレクション。
- 31) 「静斎日誌 第巻号」大野市歴史博物館文書[I0078-00248]、柳沢美美子「学区取締吉田拙蔵の『静斎日誌』」『福井県文書館研究紀要』9、2012年、p.75。
- 32) 春嶽は廃藩後に3度福井を訪れており、最初の1873年(明治6)6月の墓参時には、御泉水邸に宿泊していた。3回目81年5月17日から6月23日まで。
- 33) 福井県文書館資料叢書7『越前松平家家譜 慶永』4、2010年、p.204～p.205。
- 34) 「水態含青楼記」『福井名勝記』品川太右衛門、1893年。
- 35) 佐々木弘綱「加越日記」『大野市史』史料総括編、1985年。
- 36) 中川磐峰(信吾)『訪問録』1911年、p.80～p.88、国立国会図書館デジタルコレクション。
- 37) 前田雲洞(1746-1832)は、通称彦次郎、福井藩の儒者(石橋重吉『若越墓碑めぐり』1930年、1976年復刻版)。雲洞の子孫は、梅洞(前田彦次郎)・菊溪(前田儀兵衛)と続き藩儒を務めていた(福井県文書館資料叢書13

『福井藩士履歴』5、2017年)。「二右衛門」が「清和楼」を称するのは早くても幕末以降と推測され、「清和楼」を前田雲洞が命名したとする伝承には疑義が残る。

- 38) 「北国紀行」1909年(明治42)6月21日の条『柳田国男全集』第18巻、1999年、p.69。
- 39) 『御帰県日記』『加賀市史料』8、加賀市立図書館、1988年 p.283～p.284、国立国会図書館デジタルコレクション。
- 40) 法学者尾佐竹猛(1880-1946)は、五嶽楼店主山田仁右衛門の一人娘である山田まさと1911年(明治44)に結婚している。五嶽楼は「足羽山松玄院の直下にある著名な料亭」であり、橋南の大火で焼失したとされている(鈴木秀幸「近代史の中の郷土-加能地方出身の尾佐竹猛について-」・山岸智子「アンビヴァレンスの人-家族のなかの尾佐竹猛-」明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』日本経済評論社、2007年)。山田まさの叔母で、「五嶽楼」の名物女将であった坂上勢津については、足立尚計「山田勢津」『知られざる福井の先人たち』(フェニックス出版、1992年)でも紹介されている。
- 41) 「大日本職業別明細図 第623号 福井市・芦原温泉」1940年、福井県立図書館蔵。「足羽山墓碑略図」石橋重吉『若越墓碑めぐり』1940年(1976年復刻版)。
- 42) 尾佐竹猛は、松玄院に疎開し、福井空襲によって持参した資料のすべてを焼失した(山岸智子「アンビヴァレンスの人-家族のなかの尾佐竹猛-」明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』日本経済評論社、2007年)。
- 43) 『稿本福井市史』下巻、p.1001。
- 44) 『福井名勝記』品川太右衛門、1893年。
- 45) 見瀬和雄「近世後期城下町金沢における料理屋について」『金沢学院大学紀要』文学・美術・社会学編9、2011年。